



2017.7
vol.206



大きな鏡に映すような気持ちで 学校長 飯山 等

もう20年以前のことです。小学校の教員をしている友人から次のような話を聞きました。彼が3年生のクラスを担当しているときの学級会の折に「あと1週間しか生きられないと知ったらどうするか」という話題になったそうです。宿題なんかやらへん、遊びまくる等々、無邪気で率直な意見が次々と出てきました。それらはどれも、抑圧されていた思いの発散、満ち足りていない欲望の充足、足枷となっているものからの自由を訴えるものでした。それこそが夭折の無念を埋めうる唯一の方途であるとの思いを込めて。しかしそれらは口に出された途端、いずれも彼ら自身を真に満足させるものとはならないということを実感されました。ちょうど一番大きな数を使うことができないように、コレダと思ったことが、ソナナツマンナイヨと否定され、コッチノホウガモットイヨと乗り越えられてしまう。そんなことがひとしきり続き、そのどれもが死という圧倒的な事実の前にいずれも相手になり得ないということを確認するを得なくなり、彼らの想像力が尽きてきて言葉が出なくなったとき、一人の生徒が、「ワタシハ、オカアサンガヨロコブコトヲシタイ」とぼつりと発言したのです。教室はまったくの不意打ちを食らったかのように静まりかえり、やがて同意の表情が静かに広がっていったそうです。いったい、そのとき広がった同意の内景はいかなるものであったのでしょうか。推うにその一言は、外へ外へと向けられていた眼差し、残り少ない時間の中で

のひたすらなる自我の思いの充溢を志向していた心を大きく転じて、《いま、ここに、いる》という事実立ち帰らせ、その事実をあらためて戴き直すことへと導く声となった。そして、いのちは賜ってあるという原事実への遡行は、声高にあがっていた、私を場としてすべてを完結せんとする声を自然に沈黙・解消させて、私を育み成り立たせてきた時と場へと私を解放し、いのちの根元への謝念を、彼ら自身のいのちの願いとして聞くことになった。自分を起点とする思いを充足しようという希求が破られて、自分に至り届いている、わたしをわたしとして成り立たしている世界へと、脱力・帰入してゆく、まったく新しいいのちの願いを、「人心の至奥より出する至盛の要求」(清沢満之)として自ら聞き、その声と共に鳴り・共感し、悦服することとなったのです。蓮如上人が尽きることのない法泉として日々大切に読み続けられた聖教『安心決定鈔』には次のように教えられています。「しらざるときのいのちも阿弥陀の御いのちなりけれども、いとけなきときはしらず、すこしこざかしく自力になりて、わがいのちとおもひたらんあり、善知識、もとの阿弥陀のいのちへ帰せよと教うるを聞きて、帰命無量寿覚しつれば、わがいのちすなはち無量寿なりと信するなり」。「ワタシハ、オカアサンガヨロコブコトヲシタイ」の一言は、「もとの阿弥陀のいのちへ帰せよ」との教言として、その教室に静かに響流したのです。20年の歳月を経て、今もなお日々の生の中で思います。「正しいと思う心の中に／揺れ動くものがある／今日私は私の顔を／していただろうか／大きな鏡に／映すような気持ちで／目を閉じる」(星野富弘)。